

Title	新疆における盛世才の統治と粛清：一九三七年～三八年
Sub Title	Rule and purge by Sheng Shicai in Xinjiang : 1937-38
Author	木下, 恵二(Kinoshita, Keiji)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科
Publication year	2011
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.89, (2011. 6) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-00000089-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新疆における盛世才の統治と肅清

——一九三七年～三八年——

木 下 恵 二

- 一 問題の所在
- 二 盛世才による大規模肅清
 - (一) クーデタへの危機感
 - (二) スターリンへの忠誠
- 三 抗日体制下の南疆
 - (一) 盛世才と抗日
 - (二) 抑圧体制と抗日宣伝
 - (三) ソ連勢力の後退と民衆生活の混乱
- 四 結 語

一 問題の所在

二〇世紀前半の新疆においては、少数派の支配民族たる漢民族が統治権力を維持し続けた。漢族は全人口の数パーセントに過ぎず、他の被支配諸民族とは言語、文化、宗教、風貌すべてにおいて完全に異なっていた。国民国家形成を促す条件は、経済、教育、交通などの諸側面でいづれも未発達であった。

中央政府は新疆を統治する実質的な力を有しておらず、新疆は名目上中国の主権下でありながら、実際には独立国家の様相を呈していた。漢族地域権力は中央政府の統制からは自由であったが、「中国」というアイデンティティの下に新疆を統治した。そして植民地主義と戦争の時代の中で、歴代の漢族地域権力は新疆の近代化と領土の保全を統治の重要な課題として抱えていた。新疆の統治者はそれぞれに、中央政府の支配下にあるということとは別の意味で新疆が「中国」の一部であるという自身の想定に基づき、また新疆自体の近代化を目標として統治をおこなったのであり、この両者の関係がどのように作用してきたかを見ることは新疆の「中国」への統合を考える上で重要である。

一九三三年に新疆の最高権力者となった盛世才は、当初ソ連の影響を受けて民族平等政策を実施し、各民族の存在を認め、それぞれの文化を発展させるという方法を通じて、新疆における中国ネイションの形成を図ろうとした¹⁾。近代化と領土の保全を実現していくためには、支配民族と被支配諸民族との間の文化的断絶を架橋し、支配民族と非支配諸民族という区分自体を現実のないものにすることは不可欠な道であった。それゆえ言語と教育、政治への参加は重要な焦点であり、民族語による教育をおこなう学校建設運動と、行政への非漢族の参加は、不十分な点を多々残しながらも、ネイション形成のための一歩であった。

しかし、盛世才政権の民族政策は一九三七年には実質的に破綻してしまった。破綻をもたらした要因はひとつには

集権化を当地民族の自治的状況よりも優先したために、新疆の有力者であったマフムードの逃亡と新疆での反乱を引き起こしてしまったことにあるが、⁽²⁾ 決定的な要因は三七年後半から三八年前半にかけて盛世才によっておこなわれた大規模肅清であった。これによって、名目上は民族平等政策の看板は掲げ続けられたものの、実質的には抑圧体制下でネイション形成は頓挫することになった。

盛世才は当時から現在に至るまで非常に道徳的および政治的批判を受けやすい人物である。政治的手法の残酷さや肅清された人々の没収財産の一部を横領するなど、人間的に非難される面は確かに存在するが、それ以上にラティモアが「カメレオン軍閥」⁽³⁾と称したようにソ連、中国共産党、中国国民党とそれぞれ手を結び、一方的に関係を絶った経験が特に歴史的評価の低さにつながっている。盛世才に対する中国大陸の研究の伝統的評価は、彼の行動の基準は自身の権力維持であり、ソ連への依存や中国共産党との提携は「偽装進歩」であり、その本質は反動的な「軍閥」であるというものであった。⁽⁴⁾ 最初にそれと異なる盛世才像を描いたのはアレン・S・ホワイティングであった。彼は盛世才との共著の中で、主に盛世才の回想録に依拠しながら、盛の社会主義信奉が本気であり、彼は新疆を中国におけるソヴィエトのモデルにしようとしたと論じた。⁽⁵⁾ 一九九〇年代以降、新しい史料の発掘とともに、中国においても盛世才の社会主義信奉を彼の転向までは「偽装」ではなかったとする研究が生まれている。⁽⁶⁾

本稿は、そのような研究潮流を踏まえながら、民族政策の実質的な破綻を決定づけた大規模肅清に盛世才を駆り立てた要因は何なのか、その結果構築されていった政治体制は国家建設、ネイション形成という点で新疆の住民、特に新疆のウイグル社会にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしようとするものである。⁽⁷⁾

二 盛世才による大規模肅清

(一) クーデタへの危機感

一九三七年八月から三八年前半にかけて、ウルムチを中心とした新疆各地で盛世才による大規模な肅清が展開された。この肅清の対象は民族を問わず、思想傾向を問わず、官僚、教員、富裕商人、コミンテルン人員など多岐にわたった。これによって逮捕された人数はおよそ二八〇〇名とされる⁽⁸⁾。なぜこのような肅清がこの時期におこなわれたのか。『新疆簡史』は、抗日戦争の勃発によって国民政府が新疆に注意を向ける余裕がなくなつたこと、一九三六年にソ連で「清党運動」が展開され、盛世才がその運動の拡大を利用したこと、すなわちスターリンが中国においてもトロツキストの摘発を進めようとしたこと、マフムード・馬虎山の反乱が少数民族系の指導者を打倒する口実になつたことを挙げて説明している⁽⁹⁾。

肅清の主要な動機が、盛世才の権力の維持、強化であることは間違いない。問題はなぜこの時期にこれほど大規模な肅清が実行されたのかという点にある。国民政府は一九三五年七月に駐ソ大使館付武官の鄧文儀を新疆に派遣したのを最後に、新疆に対して直接的な影響力を行使することができなくなつていた⁽¹⁰⁾。盛世才は国民政府の「不抵抗政策」に強い不満をもっており、蒋介石や国民政府の打倒さえも望んでいた⁽¹¹⁾。このように日中全面戦争開始以前から新疆は国民政府の意向を気にする必要がなくなつており、盛世才自身にその気もなかつたため、『新疆簡史』が言うように国民政府が新疆に注意を向ける余裕がなくなつたことが、盛世才の行動に影響を与えたとは考えられない。ソ連でのスターリンによる肅清が盛世才に影響を与えたとして、それは「利用」という側面しかもたないのだろうか。ここではより具体的にこの肅清をもたらした諸要因を検討し、盛世才がどのような動機に基づいて新疆統治をおこなつ

ていたのかを検討したい。⁽¹²⁾

最初に挙げておかなければならないのは、盛世才のクーデタへの危機感である。民国期以降、新疆における政權交代は、楊增新を殺害した「七七クーデタ」（一九二八年）、金樹仁を追い落とした「四一二クーデタ」（一九三三年）、盛世才自身が自身の権力掌握のためにおこなった陶明樾、陳中、李笑天殺害のクーデタ（一九三三年）など、全てクーデタによっておこなわれてきた。盛世才が次のクーデタの発生を恐れるのは当然であろう。今回の肅清の最初の主要な犠牲者は教育廳長の張馨であった。彼は「七七クーデタ」と「四一二クーデタ」双方に関与した（あるいは関与を疑われた）人物であり、盛世才との間に矛盾があった。⁽¹³⁾彼の逮捕を皮切りに、省政府、督弁公署の主要幹部が続々逮捕されていった。

また、肅清開始前の一九三七年四月には、カシユガル区におけるウイグルの最有力軍事指導者であったマフムードのインド逃亡事件が起こり、五月三〇日にはマフムードの残存部隊とホータンの馬虎山回族部隊が共に蜂起した。蜂起軍は一時カシユガル新市を除くカシユガル区、ホータン区の主要都市を支配下におき、九月にソ連軍の介入によって鎮圧された。盛世才の肅清はこの蜂起の最終局面で開始されたのである。

この新疆での少数民族による蜂起が、盛世才のクーデタへの危機感を増幅したことは想像に難くない。最初の肅清で張馨とともに逮捕された者に、モンゴル族の西里克（新疆省教育廳副廳長兼ウルムチ・モンゴル文化促進会会長）⁽¹⁴⁾がいた。彼の娘の回想によれば、マフムードの残存部隊が拳兵する際に、西里克に拳兵への支持と新疆各地のモンゴルへ一致行動を呼びかけるよう求める手紙を書き、それが盛世才の手に落ちたために逮捕されたと述べている。⁽¹⁴⁾これが事実かどうか確証はないが、マフムード自身、新疆の主要な非漢族有力者間に連絡があったことを認めており、⁽¹⁵⁾このようなことが起こった可能性はある。実際には、逮捕は西里克が張馨らと省政權転覆を共謀したという名目でおこなわれた。⁽¹⁶⁾盛世才が省政府部内の反盛世才勢力と少数民族が結託したクーデタに危機感を抱いており、この危機感が大規模な肅

清の開始に影響を与えていたことがうかがわれる。一九三七年一〇月には民族平等政策の象徴であったホージャ・ニヤーズ省副主席が逮捕され、民族政策の実質的な破綻を印象づけた。ただし、肅清がこの範囲でとどまらなかったことは、クーデタへの危機感だけが大規模な肅清を引き起こした要因ではなかったことを物語っている。

(二) スターリンへの忠誠

もう一つの重要な肅清の要因を考えるためには、盛世才自身が中国革命とソ連との関係の中で自分をどのように位置づけようとしていたかを確認する必要がある。彼はソ連と関係を持ち始めた一九三四年頃にはすでに、「新疆をソヴィエト化し、中国のソヴィエト地域に加わる」という考えを有しており、ソ連指導部はその考えを誤りであると制している⁽¹⁷⁾。彼は回顧録において当時マルクス主義を信奉していたこと、新疆に行った動機のひとつが「マルクス主義理論をもとに建設されているソヴィエト・ロシアの実際状況を見たかった」ことであると述べている⁽¹⁸⁾。彼の日本留学時代の同郷会の友人で、彼が新疆統治のために招いた「十大博士」⁽¹⁹⁾の多くが中国共産党員や社会主義に関心を持つ人々であったことや、盛世才が一九二七年から二九年まで国民革命軍で参謀などの職を務めていた際にも国民党に加入しなかった事実を見ても、彼がマルクス主義、ソ連に強い関心を抱いていたことがうかがえる。

また一九三六年三月にモスクワにいる王明に届いた盛世才の手紙は、自らを「中国革命の最も強力な指導者」と位置づけて、ソ連の戦略に関して意見を述べ、新疆を通じての紅軍への援助を申し出ている⁽²⁰⁾。一〇月の王明宛の手紙でも、盛は自分が信頼に足るものであることを訴えながら中国共産党との協力関係を強く求め、紅軍のためにも陝西、甘肅、青海、寧夏、新疆の五省を中国革命の根拠地とすべきであると提案し、あわせて紅軍への大規模な装備等の援助を準備したいと申し出ている⁽²¹⁾。これらの事実から、盛世才は国際共産主義運動の中に自分の確固たる地位を築きたいと考えていたことがわかる。しかもそれは中国共産党に従属するのではなく、むしろ援助者として中国共産党と対

等、あわよくばより優位に立ちたいと考えていたことがうかがえる。そして中国の社会主義勢力において重要な地位を占めるためには、何よりも社会主義勢力の最高指導者であるスターリンに認められることが重要であった。スターリンに忠誠を示し、彼に認められることは盛世才にとって最重要課題であった。

一九三七年五月、コミンテルンの指示の下、新疆は壊滅状態にあった紅軍の西路軍の残存兵を受け入れ、その後、新疆はソ連から中国共産党への援助、連絡通路となった⁽²²⁾。十月にはウルムチに八路軍駐新疆弁事処が設立され、盛世才政権と中国共産党との間に抗日民族統一戦線が樹立された。こうして実際に盛世才の統治する新疆は中国共産党にとって非常に重要な存在となった。

盛世才が中国共産党に入党を申し出たのは、一月に王明と康生が延安への帰路途上にウルムチへ立ち寄ったときであった⁽²³⁾。これを盛世才が中国共産党の権威を認め、それに服従しようとしたととらえることはできない。これは新疆が中国共産党に対するソ連からの援助・連絡通路として重要な地位を築いた後の申し出だからである。盛世才の回憶録を見る限りでは、彼はこの入党の申し出によってソ連と中国共産党の自身に対する評価を確認しようとしたとよ⁽²⁴⁾うである。そして当初の中国共産党の肯定的な反応に彼は満足していた。

ところがソ連指導部によってこの申し出が却下されたことにより、盛世才は非常に不安になった。そしてつい一九三八年九月彼は直接モスクワを訪問し、スターリンと三度にわたる会談を実現した。彼はスターリンが三度も自分と会い、中国の最高指導者のように扱い、新疆の重要性と新疆の将来についての自分の考えに個人的な関心と承認を表明したことに非常に満足した⁽²⁵⁾。

彼は帰国後、新疆で活動している中国共産黨員への不信感をあらわにし始めた。一九三八年二月二日におこなわれた盛世才とソ連駐ウルムチ領事オブディエンコ (I. H. Ovdienko) との会談で、盛世才は新疆における中国共産党の党組織活動に対する不満を党代表である鄧発に告げたことを明らかにし、新疆における中国共産黨員の中には自分

を信用せず疑惑を持って接するものがあると不平を述べた。またこの問題がモスクワに報告され、コミンテルンとスターリン自身によって解決されることを希望した⁽²⁶⁾。また、中国共産党はコミンテルンの意向を無視して盛世才の入党を決定し、一九三八年一二月に林彪がウルムチで盛世才にこの決定を伝えた⁽²⁷⁾。このようなモスクワを無視した行動も、すでにモスクワでスターリンの意向を直接聞いていた盛世才に不信感を強めさせた可能性は高い。

スターリンの自分への信頼に自信を深め、また中国共産党への不信感を募らせた盛世才は、一九三九年七月以降新疆を国民党とも中国共産党とも異なる「六大政策政治集団」⁽²⁸⁾であると主張し始め、「抗戦勝利、新中国建設の際には、最も光栄ある歴史を有する独立した政治集団となる」として、自らを中国の最も代表的な政治指導者と位置づけていった⁽²⁹⁾。

このように彼は少なくとも一九四〇年までは一貫してスターリンに認められ、評価されることを望み、中国の社会主義勢力の代表、中国革命の代表としての政治的地位を確立しようとしてきた。そしてこのような彼の政治目標が三七、三八年の大規模粛清実行の要因ともなったのである。

スターリンによる自らの評価を気にする盛世才にとって、すでにソ連で展開されていた粛清は、スターリンが積極的に進めているがゆえに、新疆でも同じく展開されるべきものであった。この点において、盛世才の粛清はソ連の粛清を自身の権力保持のために利用する側面をもつとともに、スターリンへの忠誠を示すための積極的な模倣でもあった。

さらに、直接的なトロツキスト摘発の働きかけが王明によってもたらされた。一九三七年一月に王明らがウルムチに立ち寄った際、王明は盛世才にトロツキストとの闘争を提起した。盛世才はコミンテルンから派遣されてきたなかの誰がトロツキストであるか分からないと、王明に全員の写真を見せて尋ねたという⁽³⁰⁾。王明は三七年一月二五日付で、ウルムチからスターリンとデイミトロフに手紙を送っており、その中で新疆に派遣されてきた二五名の中国人

はトロツキストであったとし、特にナニマロフ（王寿成・兪秀松）の名を挙げて訴えている⁽³¹⁾。王明と王寿成の間には、一九二〇年代モスクワ中山大学にいたころから確執があった⁽³²⁾。王明はモスクワを発つ直前クレムリンでスターリンと会見しており、スターリンは王明に統一戦線戦略の実行とトロツキストに対する闘争が彼に課された重要な任務であることを伝え、特に強い調子でトロツキストとの闘争の強化を訴えていた⁽³³⁾。当然盛世才は「トロツキスト」の逮捕に乗り出し、コミンテルンから派遣されてきた人員は逮捕された。そのなかには盛世才の妹婿として信頼も厚く、新疆の民族平等政策を実質的に指導していた王寿成（兪秀松）も含まれていた。これによって新疆の民族平等政策は大きな打撃を受けたのである。

コミンテルンから派遣されてきた二五名全員がトロツキストであったのなら、さらに多くのトロツキストが新疆にいても不思議ではなかった。それまで国民政府寄りの古株の省政府官僚と少数民族が主であった肅清対象は、一気にコミンテルン人員、ソ連駐ウルムチ総領事アプレソフ、自身が招いた共産主義者やその傾向のある同郷の留学仲間（「十大博士」）など、ありとあらゆる種類の人々に拡大されていった。

このような大規模な肅清はただでさえ統治のための人材が乏しい新疆をさらなる人材不足に陥らせ、行政組織の無力化をもたらした。より近代的な行政制度を構築しようとする国家建設の試みは打撃を受け、軍人と警察の権力が突出するようになっていった。例えばカシユガル区では、一九三七年末に行政長の万獻廷がウルムチに呼ばれた後、行政長が空席となり、軍事司令官であった蔣有芬がその職務を兼務した。新たな文官の行政長が就任したのは一九四一年二月であった⁽³⁴⁾。公職に就いていた非漢族の有力者が軒並み逮捕され、民族政策の指導者であった王寿成も排除された。

盛世才がこの時期に大肅清をおこなったのは、第一に少数民族の反乱に直面して、クーデタへの恐怖心を募らせ、先手を打って「危険な」分子を除去しようとしたからであり、第二に王明らを通じて伝えられたトロツキスト肅清の

強化というスターリンの意を受けて、盛がスターリンへの忠誠を示すために「積極的な模倣」をおこなったためであつた。こうして盛世才は従来の民族平等政策を実質的に破綻させ、かつ行政組織の無力化を招来し、ネイション形成と国家建設の両面における試みを頓挫させた。

三 抗日体制下の南疆

(一) 盛世才と抗日

盛世才の肅清に伴う民族政策の実質的な破綻にともなつて、新疆の住民はどのような統治体制の下に置かれたのだろうか。その点について、南疆のウイグルを中心に検討してみたい。分析対象を南疆に限定するのは、一つには史料的な理由によるが、なによりもカシユガルを中心とした南疆こそが現在中国の民族問題においてしばしば取り上げられるウイグルの主要な居住地域だからである。ここでまず確認しなければならないのは、盛世才がスターリンに認められ、中国社会主義勢力の指導者として何をおこなおうとしていたのかである。彼の言動をみると常に彼の念頭にあつたのは「抗日」であつた。

盛世才の日本に対する姿勢が非常に厳しいものであつたことは、その経歴からも明らかである。⁽³⁵⁾ 彼は東北奉天省開原県盛家屯の出身であり、日本留学中に一九一九年ヴェルサイユ講和会議に反対して、帰国運動に積極的に参加した。また軍人を志した後に知り合い、実子のように目をかけてもらい、婚姻により義父となつた郭松齢の張作霖に対する反乱に留学先の日本から帰国して加わつた。結果的に、郭松齢は日本の干渉によって敗れ、命を失つた。このような彼の経歴は、一九三一年満洲事変以後の日本の東北分割占領という事実とともに、彼の反日姿勢の十分な根拠となつ

ている。

盛世才は南京国民政府の「不抵抗政策」に対して強い不満を抱いていた。一九三六年七月一四日に国民党中央委員会に対し、彼は「七項目救国綱領」を打電した。⁽³⁶⁾それは帝国主義勢力に対する「不抵抗政策」を批判し、中国が一つとなって帝国主義の侵略と戦い、また「世界の我々を平等に遇する民族」(孫文遺囑)とともに協力することを訴える内容であった。

盛世才は権力を握ってまもない一九三四年一月にソ連に中国の西北地区で共産主義を実施し、「蒋介石指導の中央政府を転覆することが中国と新疆を救う唯一の道である」と伝えているし、⁽³⁷⁾三六年一〇月四日の王明への手紙の中でも「陝西、甘肅、青海、寧夏、新疆の五省を中国革命の根拠地に変えるべきである」と伝えている。⁽³⁸⁾後者の提案には、張学良との連携という前提があった。一九三六年八月張学良は栗又文と董彦平の二名を新疆に送り、共同抗日とソ連からの軍事援助について盛と相談していた。⁽³⁹⁾一二月の西安事件発生当初、盛は張学良、楊虎城を積極的に支持する姿勢を示し、後にソ連の意向によつてその支持を放棄したことが明らかになっている。⁽⁴⁰⁾盛には西北地域を基盤としてソ連と協力して日本と対抗するという一貫した構想があった。

日本軍の綏遠侵攻のニュースを受け、一九三六年一二月から新疆反帝民衆聯合会(以下、反帝会)は抗日募金運動を開始した。抗日戦争開始後、募金運動は本格化し、三八年以後には抗日募金活動が日常的な活動として展開された。一九四〇年まで積極的に新疆各地で続けられ、戦闘機一〇機を購入し国民政府へ送るなどの支援がおこなわれた。これもまた盛の抗日に対する積極的な姿勢を反映している。

さらに盛世才は単に新疆を抗日戦争の後方基地と考えていただけではなかった。盛がモスクワ訪問から帰国した直後の一九三八年九月に第三回全疆民衆大会が開催された。おそらくこの大会への出席のことだと思われるが、同時期にカシユガル区の地元の指導者五〇〇名が国費でウルムチへ招待されたとイギリス領事は報告している。⁽⁴¹⁾盛世才は彼

らと会い、「新疆は決定的なそしてそれゆえ激しく血の流れる戦争が戦われる最後の場所である。だから我々は自ら奮い立たせ、強い抵抗をおこなえる準備をし、侵略者を確実に撃退しなければならぬ」と述べ、各々が家に帰り、戦闘の準備を始めることを命じたという。新疆における日本との最終決戦をソ連とともに戦うというシナリオを盛世才が思い描いていた可能性は高い。そしてそこでの勝利は間違いなく彼を中国の最高指導者とするものであった。それゆえ、一九四一年四月日ソ中立条約、六月独ソ戦開始を契機にソ連に対する彼の態度が変わっていったのである。

このような盛世才の政治目標のもと、新疆の統治体制もそれ以前とは姿を変えていった。次に住民がどのような新たな統治体制下に置かれていったのか、実際の統治の様相を新疆のカシユガル区を中心に確認してみる。

(二) 抑圧体制と抗日宣伝

一九三七年九月マフムードの残存部隊と馬虎山軍の敗北後、カシユガル区、ホータン区では軍、警察による反乱者、反乱協力者摘発活動が活発に展開された。イギリス領事館の情報では、一九三七年九月から一〇月の間にカシユガルで四千人、一九三八年初めまでにホータンからカシユガルまでの地域で一万八千人が逮捕されたと伝えられている。⁽⁴²⁾

摘発活動はカシユガルでは以前から警察の中心にいたコミンテルン人員カーディル・ハジ⁽⁴³⁾によって担われた。反乱鎮圧に介入した赤軍の中のクルグズ(キルギス)部隊はカシユガル区やホータン区に駐留し、それらとともにやってきた中央アジア出身者が各地の警察の責任者として配置された⁽⁴⁴⁾。彼らは一九三九年に新疆を離れるまで、それぞれの地で権力を握った。また当局は警察や軍隊への動員対象からウイグルを外し、主に現地のクルグズに頼るようになった⁽⁴⁵⁾。こうして新疆では中央アジア出身者が権力を握り、主にクルグズによって構成される軍隊、警察を中心とする統治体制が形成され、ウイグルは徹底的に抑圧される状況に置かれた。まさに盛世才の肅清と同時期に進められたことにより、摘発活動は容赦なくおこなわれ、行政長自身が不在になるなど軍隊、警察権力を抑制する力は従来の行政機構か

ら全く失われていた。

また、ホータン、カシユガル、アクス地域に一八歳から二八歳の若者を教育するために多くの学校が開校された。教育は強制的におこなわれ、カリキュラムには毎日一時間の軍事教練が含まれていた。⁽⁴⁶⁾ 以前の有力者や富裕層、イギリスと関係のある人物、インド経由でハジ（巡礼）をおこなった人物の多くが捕らえられ、その財産は没収された。⁽⁴⁷⁾ このようにウイグル社会に対する厳格な管理・抑圧がおこなわれた。地元住民が主体となってウイグル族文化促進会により設立された多くの会立学校の教育内容にどのような変化が起こったかを確認できる史料はないが、政府による強い介入がおこなわれたことが推測される。

このような抑圧と並行して進められたのが、反日宣伝であった。馬虎山らの反乱前の一九三六年九月にすでに日貨（日本商品）ボイコットキャンペーンが開始され、日本製品への輸入関税が引き上げられ、ほぼ禁輸に等しい状況になっていた。⁽⁴⁸⁾ 一九三五年九月一八日にも滿洲事変記念日としてカシユガルで集会がおこなわれており、日貨ボイコットキャンペーンもこの記念日を意識して始められたと考えられる。一九三八年四月一二日（新疆四一二クーデタ記念日）、および七月七日（盧溝橋事件記念日）には反日集会やデモがおこなわれた。⁽⁴⁹⁾ 第三回全疆民衆大会が開かれ、盛世才が日本との新疆における「決定的な戦争」について言及したことを受けて、一月からカシユガルのバザールではほぼ毎日反日宣伝活動がおこなわれた。⁽⁵¹⁾ 一〇月三一日にはカシユガルの全ての学童に日本の侵略と暴行の詳細についての授業がおこなわれ、彼らが大きくなったら国を助けるように、また両親や親戚に今そうするよう勧めなさいと教えられた。⁽⁵²⁾ また、これらの宣伝に伴って抗日募金が繰り返し集められた。一九三八年三月から三九年九月までに毎回およそ省票銀二五〇〇万両の募金が二四回にわたってカシユガル区からウルムチに送金されていることが確認できる。⁽⁵³⁾ このような宣伝を抑圧体制の中に置かれていた住民たちはどのように受け止めていただろうか。それをうかがわせる興味深い演説がある。行政長も兼務していた軍事司令官蔣有芬は、一九三八年一月九日カシユガルの中心モスク

であるイドガー・モスク向かいのバザールの中央でウイグル語の通訳付で演説した。そのなかで彼は「日本を我々共通の憎むべき敵であるとみなすことは我々全員の義務であり、それゆえ、彼らに全く共感などもってはならない。よく知っているように、現在我々は我々の国で戦争をしており、常にあなたに関係のある無辜の中国人が日本人からおそろしく残酷な攻撃を受けている」と述べている。⁽⁵⁵⁾ このような発言は明らかに、日本を敵と見なさず、日本に共感を持っている人々の存在を推測させる。

また、一時期反日宣伝が途絶えた時期があつた。一九三八年一二月の約一カ月反日宣伝が控えられたが、これは反乱を警戒してカシユガル旧市の漢人が新市に移動させられた時期であつた。イギリス領事は、日本の新疆侵略の危機を訴える宣伝が、民衆の中の不満分子の希望を膨らませていると考えられたことが原因であるという意見を伝えて⁽⁵⁶⁾いる。さらにイギリス領事はヤルカンドで日本軍が内モンゴルからウルムチに迫っているという噂が人々を興奮させたという情報を伝え、新疆の民衆の多くが現体制の何らかの変化を期待していると観測を述べている。⁽⁵⁶⁾

さらに興味深い出来事が、一九四一年五月にカシユガルで起こつた。突然反日のポスターが全て取り外され、学童たちが日本を賛美し、演説では「日本は我々の友人である」と語られた。この状況は二週間続き、その後なくなつた。⁽⁵⁷⁾ この背景には、日ソ不可侵条約の影響があるのかもしれない。とにかく、この出来事はこのような反日宣伝が地元住民にとっては全く権力への追従に過ぎなかつたことをはっきりと物語っている。そして、住民たちは現在の抑圧体制を変えてくれる外部の力に期待を寄せるほかなかつた。

(三) ソ連勢力の後退と民衆生活の混乱

民衆生活の安定が保証されているなら、政治的に抑圧体制下に置かれていても一定の支配の正統性が調達される場合がある。しかし、南疆においては、ソ連の影響力の低下とともに民衆生活も混乱状態に陥ることになった。

一九三八年以降、新疆の反乱に関与したという口実によって、英国と関係のある者は逮捕や監視の対象となり、英国籍商人は商取引が不可能になった。⁽⁵⁸⁾ 他方でソ連の商人は新疆においてソ連国内より低価格で地元の商品とのバーター取引を行い、元来英国の影響力が強かった新疆地域の交易を完全に牛耳った。中央アジアの主要都市での日用品不足を顧みない新疆との交易はソ連の政治的動機に基づくものであった。⁽⁵⁹⁾ 主に日用品をソ連からの輸入品に頼る新疆の民衆生活は、完全にソ連に依存するようになっていった。

しかし、一九三九年九月からソ連からの輸入が減少し、その結果日用品の価格が大幅に上昇した。灯油や砂糖といったソ連からの主要な輸入品を中心に基本的な生活必需品の平均価格が四〇年五月には通常の五倍に跳ね上がった。⁽⁶⁰⁾ カシユガル地方当局はこの極端なインフレに対して、全ての日用品の価格を固定する命令を出したが、その結果、商品はバザールから姿を消した。さらに四一年六月末にはカシユガルに独ソ戦開始のニュースが伝えられた。この結果、商人たちはソ連製品の備蓄を始め、灯油や砂糖といった日用品はますます価格が高騰し、やがて個人では入手困難になった。⁽⁶¹⁾ 警察は売り惜しみをする商店を襲撃し、強制的に店を再開させるなどの措置に出たが、商人たちもそれに屈せず抵抗し、農産物もバザールでは手に入られない状態に陥った。⁽⁶²⁾

一九三九年九月第二次世界大戦の勃発とともに、ソ連は戦時体制に移行し、もはや新疆での影響力を以前のように維持する余裕を失った。ソ連への完全な依存状態に置かれていた新疆の民衆生活はそれによって四〇年代に入ると苦境に追い込まれたのである。

一九四〇年にはアルタイでカザフの反乱が起こった。カシユガルやヤルカンドの部隊の多くがその反乱に対処するために北上していった。⁽⁶³⁾ ホータン地区でも五月に反乱が起こり、ソ連軍と思われる部隊の増援を受けながらも七月に入っても鎮圧することができなかった。⁽⁶⁴⁾ マフムードの残存部隊と馬虎山部隊の反乱後、盛世才はソ連の力を背景に軍事力と警察力によって新疆を押さえてきたが、ソ連の余力がなくなり各地で矛盾が噴出し始めると、それに対処する

ことができなくなったのである。

一九四〇年四月一二日、毎年繰り返される「四一ニクーデタ」記念式典では、近年にない光景が現れた。カシユガルでは演台に八名ほどの宗教指導者が登り、軍人たちはカーズイたちに多くの気遣いをしていた。⁽⁶⁵⁾ ヤルカンドの記念式典では、民衆集会はほとんど全てカーズイたちによって指揮され、公的な存在は旧市の県長だけであった。⁽⁶⁶⁾ 押さえ込む力を失い、有効に機能する行政制度を失っている地方当局は、ウイグル社会の有力者である旧来の宗教指導者たちに依存していく方法をとるしかなかったのである。

四 結 語

盛世才政権時期は権力確立後、政策的観点から大きく三つの時期に区分できる。一九三四年から三十七年九月までが第一期であり、民族平等政策によるネイション形成を追求しつつ、一九三六年以降には抗日を意識した具体的な政治活動が開始され、中央集権化による国家建設が進められた時期であった。これらの政策の矛盾がマフムード逃亡、マフムード残存部隊と馬虎山部隊の蜂起を引き起こした。第二期は三十七年九月から一九四一年夏までで、大規模粛清に始まり、警察力に依拠した抑圧体制が構築され、盛世才は自身が中国革命の代表的指導者となるためスターリンのソ連への忠誠を示しつつ、抗日を政権の中心テーマとした。第三期は一九四一年夏から四四年八月までで、独ソ戦の開始とともに抗日におけるソ連の支援をあてにできなくなった盛世才は国民政府との協力関係へと移行したが、権力の維持に失敗し国民政府によって離職させられた。

盛世才政権が初期に企図していたネイション形成を挫折させた要因のひとつは、マフムードの逃亡、それに続く馬虎山とマフムード残存軍の反乱であり、ウイグル改革派との協力の失敗であった。しかし、それとともに盛世才の政

治目標追求も新疆におけるネイション形成と国家建設をとともに破綻させた重要な要因であった。ソ連に依存し、また魅力を感じていた盛世才は抗日と中国革命において重要な役割を果たすために、さらなる権力強化をスターリン的手法で追求した。それによって生み出されたのは、ほとんど無力化した行政制度のもと、警察と軍隊だけが権力を握った抑圧体制であった。そしてその体制を支えている力はソ連の力であった。ソ連に依拠しながら抗日をおこなうことこそ、盛世才にとって新疆が「中国」の一部であることの意味であった。そして「中国」の一部であることが、新疆においてネイション形成や国家建設のための施策を粘り強く積み上げていくことよりも優先されたのである。

抗日の宣伝が繰り返されたが、それはウイグル民衆に共感を抱かせるものではなかった。政権はウイグルが「中国」ネイションの一員として自らを位置づけさせるような一切の政治的理念や権利を提示できなかった。ウイグルにとって抗日戦争は遠くで戦われている戦争に過ぎず、しかも自分たちを抑圧する体制が敵対する日本はむしろ期待の対象となった⁽⁶⁷⁾。さらにソ連が戦時体制に移行し、新疆に経済的に力を注ぐ余裕を失うにつれて、完全にソ連に依存していた新疆は生活面での安定も失われ、徐々に秩序の崩壊が進んでいった。

ウイグルの人々が期待を抱く外部勢力には、中国の中央政府も含まれる可能性があった。新疆に中央政府の権力が及んでいないことは周知の事実であり、抑圧している主体はあくまでも盛世才の政権とソ連であった。もちろん民族意識の成長とともに漢族自体を抑圧の主体と認識する見方もなかったわけではないが、それが強い共通認識であったことを示す根拠はない。むしろ二〇世紀前半の新疆においては、清末新政時期の小規模の漢語教育の強制を除けば、漢文化への文化的同化の強制はおこなわれなかった。それゆえもし抑圧と混乱を取り除く力を有するならば、中央政府はウイグルのそのような期待を重要な心理的基盤として新疆を再統合できる可能性があったのである。

- (1) 本稿ではアンソニー・D・スミスの議論に依拠し、ネイションをエスニックな要素と、政治的理念の共有に基づいた権利と義務の平等性、すなわち市民的要素の並存するものと考ええる。「ネイション形成」とは、ネイションの核となるエスニックな要素と市民的要素を定義づけ、民衆に浸透させる過程をさす。アントニー・D・スミス著、巢山靖司・高城和義ほか訳『ネイションとエスニシティ 歴史社会学的考察』、名古屋大学出版会、一九九九年、一七六頁。
- (2) 拙論「一九三〇年代新疆盛世才政権下の『ソ連型』民族政策とその政治的矛盾」『史学』第七八巻第四号、二〇〇九年一二月。
- (3) ラティモア著、中国研究所訳『アジアの焦点』、中国研究所、一九五一年、九六頁。
- (4) 新疆社会科学院歴史研究所編『新疆簡史』第三巻、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九八七年、二〇六頁。
- (5) Allen S. Whiting and General Sheng Shih-tsai, *Sinkiang: Pawn or Pivot?*, Michigan State University Press, Michigan, 1958, p. 137.
- (6) 趙明「怎樣評價盛世才」『西域研究』一九九二年第三期。王立業「論反帝会及其與盛世才的關係」『新疆大学学报』(哲学社会科学版)、一九九八年第二六巻第一期。蔡錦松「盛世才在新疆」、河南人民出版社、鄭州、一九九八年。李嘉谷「試析盛世才統治新疆前期的親蘇親共政策」樊景河主編『中俄關係的歷史與現實』、河南大学出版社、開封、二〇〇四年、三六二―三八〇頁。
- (7) ここでいう「国家建設」とは、集権的で効率的な行政制度の構築の過程をさす。近代国家は徴税と治安維持を越えた広範な生活領域への行政の介入を伴うため、そのような制度化は不可欠である。「ネイション形成」と「国家建設」の過程は相互補完的に進む場合もあるが、多エスニックな社会においては「国家建設」の進展が「ネイション形成」を阻害する場合も少なからず起こる。
- (8) 安甯『新疆内幕』、創藝出版社、シンガポール、一九五二年、一〇八、一〇九頁。張大軍『新疆風暴七十年』第七冊、蘭溪出版社、台北、一九八〇年、三七三―三頁。
- (9) 前掲、『新疆簡史』、二九二頁。
- (10) 鄧文儀は歓迎会での演説で、中央の対日政策について、なぜすぐに対日戦争を発動しないのかに関する苦衷と理由を説明したという。この対日政策が盛世才政権の主要な不満であったことを示している。前掲、『新疆内幕』、八一、八二頁。
- (11) 一九三四年盛世才は駐ウルムチ総領事アブレソフを通じてソ連に手紙を送り、そこで「蒋介石指導の中央政府を転覆する

- ことが中国を救い、新疆を救う唯一の道である」と述べている。これは盛世才が国民政府に帰順した後、ソ連によって国民政府に暴露され、盛世才もその事実については認めている。中国国民党中央委員会党史資料編印『中華民国重要史料初編——対日抗戦時期 第三編、戦時外交（参）』、台北、一九八一年、四三七頁。
- (12) 他の先行研究を見ると、ホワイティングは、盛世才自身のいう「国際的陰謀」の根拠は乏しく、盛世才の疑念の根拠がなにかは分からないとした上で、これをスターリニズムの新疆への拡大と見ることができると述べている。この指摘は現在から見ても鋭い。王柯は盛世才のソ連への接近が単に「ソ連の力を利用してその支配を確立・維持すること」であったとした上で、この肅清を「ソ連勢力の存在による新疆省の二重権力構造に対する盛世才の反発」として見る。また民族政策の実質的破綻をも含めて、「二重権力構造におけるソ連勢力と民族指導者との連帯に対する盛世才の反感」がその重要な動機であったとしている。Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., pp. 52-53. 王柯『東トルキスタン共和国研究 中国のイスラムと民族問題』、東京大学出版会、一九九五年、七六～八〇頁。
- (13) 張式琬「我父親張馨的一生」、中国人民政治協商會議烏魯木齊市委員會文史資料研究委員會編『烏魯木齊文史資料』第一輯、新疆青年出版社、烏魯木齊、一九八二年、六三～八二頁。
- (14) 西聯華「監獄生活回顧」、中国人民政治協商會議新疆維吾爾自治區委員會文史資料研究委員會編『新疆文史資料選輯』第七輯、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九八一年、一一八頁。
- (15) India Office Library and Records (IOR) : Political & Secret Files, Collection 12, Turkestan, British Library, London, 2387, 1937. 7. 22.
- (16) 中国人民政治協商會議新疆維吾爾自治區委員會文史資料研究委員會、新疆維吾爾自治區檔案館編『東北抗日義勇軍在新疆——新疆文史資料第二三輯』、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九九一年、七八、七九頁。
- (17) ソ連指導部から盛世才とソブレノフに宛てた手紙の全文は、Raisa MIROVITSKAYA and Andrei LEDOVSKY, "The Soviet Union and the Chinese Province of Xinjiang in the Mid-1930s", *Far Eastern Affairs*, Vol. 35, Number 4, October-December 2007, pp. 94-97.
- (18) Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., p. 207. 盛世才「牧邊瑣憶」『五十年政海風雲——天山南北』、春秋出版社、台北、一九六七年、五三頁。
- (19) 新疆省権力を握った盛世才は、自らの統治を助ける人材を求めて、日本留学時代の同郷の友人であった何語竹、徐廉、郎

道衡らを新疆に招いた。彼らは「十大博士」と称された。

- (20) *Chinese Law and Government*, vol. 30, no. 1, January-February 1997, pp. 57-66.
- (21) 楊奎松『張學良與中共關係之謎』、江蘇人民出版社、南京、二〇〇六年、一三八〜一四一頁。
- (22) 西路軍の残存兵を受け入れる際、コムルで名目上省政府に服しながらも独自の軍事力をもつ自律的存在であったヨルバースが受け入れに抵抗したため、盛世才は新疆で最も先進的装備を備えた教導第四大隊を派遣し、さらに増援軍を投入してヨルバース軍を撃破した。これは盛世才政権下で新疆が安定を回復してから初めてのウイグル有力者に対する武力行使であった。従来の方針を変えてでも実現させたところに、盛世才が中国共産党に対する援助者となることを重視していたことがみてとれる。李国卿「一九三三至一九四二年在新疆的点滴回憶」、五七頁、尹玉衡「迎接西進長征紅軍來新疆回憶片斷」、六〇、六一頁、以上ともに前掲、『東北抗日義勇軍在新疆——新疆文史資料第二三輯』。
- (23) 蔡錦松は盛世才が一九三六年、三七年に何度も中国共産党への加入を求めたとしている。しかし、一九三六年三月十五日の王明への手紙では、若い頃入党しようとしたが周囲の事情のためかなわず、いまでも希望は持ち続けていると伝えているだけで、初めて連絡をとる相手への挨拶程度にしか入党に関しては触れられていない。また西路軍を受け入れた際、陳雲にも入党を求めたとされるが、これは当時西路軍とともに新疆に入った黄火青の一九八三年の座談会での発言に基づくもので、信憑性は高くない。簡単に陳雲が拒絶したと述べているが、もし本当に入党を求めていたなら、それほど簡単にすまされる申し出ではないはずである。やはり一九三七年一月に王明に申し出たのが最初の正式な入党の申し出だと考えるべきである。盛世才はあくまでも対等以上の状況で初めて申し出たと考えられる。前掲、蔡錦松「盛世才在新疆」、二四四〜二四八頁。
- (24) Allen S. Whiting and General Sheng Shih-tsai, op.cit., pp. 186-188. 一九三八年三月一六日任弼時がモスクワへ向かう途上でウルムチに立ち寄り、延安で入党の申し出が政治局員全員から歓迎されたこと、コミンテルンとスターリンに報告した後、入党手続きをおこなうことを盛に伝えた。中共中央文献研究室「任弼時年譜（一九〇四—一九五〇）」、中央文献出版社、北京、二〇〇四年、三七〇頁。
- (25) 彼はそこで中国共産党ではなく、全連邦共産党（後のソ連共産党）への入党を認められた。Allen S. Whiting and General Sheng Shih-tsai, op.cit., pp. 204-207. 盛のモスクワ訪問の事実は、鄧発のデIMITROフへの手紙でも確認できる。*Chinese Law and Government*, vol. 30, no. 1, January-February 1997, p. 70. また李嘉谷はソ連の外交史料によって、会談の存在を確

- 認している。前掲、李嘉谷「試析盛世才統治新疆前期的親蘇親共政策」、『三七二—三七三頁。
- (26) *Chinese Law and Government*, vol. 30, no. 1, January-February 1997, pp. 75-78.
- (27) *ibid.*, pp. 16-17.
- (28) 「六大政策」とは新疆の基本政策として一九三五年以来掲げられているもので、「反帝国主義、親ソ連、民族平等、平和、清廉、建設」を内容とする。
- (29) 盛世才は一九三九年七月新疆学院卒業式で初めてこのような内容の演説をおこなったと、実際にそれを聞いた趙明は述べている。前掲、趙明「怎樣評價盛世才」、三七頁。また二ヵ月後、李一欧が軍事学校卒業式で同様の演説をし、全文が雑誌『反帝戦線』に掲載されている。共青团新疆维吾尔自治区委員会、八路军駐新疆办事处記念館編『新疆民衆反帝聯合会資料彙編』、新疆青少年出版社、烏魯木齊、一九八六年、一九二、一九三頁。
- (30) 周国全、郭德宏『王明伝』、安徽人民出版社、合肥、一九九八年、一五二、一五三頁。
- (31) *Chinese Law and Government*, vol. 30, no. 2, March-April 1997, pp. 12-14. 王寿成の本名は俞秀松で、一九二〇年上海の中国共産党組織設立に関わった古参党员であった。ソ連留学後ロンドンで活動し、一九三五年ロンドンから新疆に派遣された。中共党史人物研究会編『中共党史人物傳』第二五卷、陝西人民出版社、西安、一九八五年、八〇二〇頁。
- (32) 同上、一七〇—一九頁。
- (33) 華譜編訳『季米特洛夫日記』中有関中国革命重大事件的記述』『中共党史研究』、二〇〇一年第五期、七六頁。
- (34) *IOR*, 2383, 1941. 2. 6.
- (35) 前掲、蔡錦松『盛世才在新疆』、一—二四頁。前掲、王柯『東トルキスタン共和国研究 中国のイスラムと民族問題』、四〇—四二頁。伊原吉之助『盛世才の新疆支配と毛沢民の死——抗日戦争期中ソ関係の一齣——』、竹内実編『転形期の中国』、京都大学人文科学研究所研究報告、一九八八年、一三七—一四〇頁。
- (36) 七項目救国綱領の内容は以下の通りである。一、全国各族各界同胞が心をひとつにして誠実に団結し、中国を救わなければならない、二、内戦を停止し、断固とした闘争によって中国への侵略と瓜分に反対しなければならない、三、全国各族各界同胞は全ての漢奸と断固として闘争しなければならない、四、帝国主義に対し不抵抗政策を放棄し、もつとも断固とした強硬な外交政策を採らなければならない、五、外からの経済侵略と密輸とに断固として闘争しなければならない、六、全力で国の経済と農工商業を発展させなければならない、七、孫中山先生の遺囑に従って、世界の我々を平等に遇する民族とと

- もに奮闘し、中国の存亡の危機を救わなければならない。前掲、『新疆民衆反帝聯合会資料彙編』、四七〇頁。
- (37) 前掲、『中華民國重要史料初編——対日抗戦時期 第三編、戦時外交(参)』、四三七頁。
- (38) 前掲、楊奎松『張学良與中共關係之謎』、一四〇、一四一頁。
- (39) 張友坤主編『張学良年譜』、社会科学文献出版社、一九九六年、一〇二、一〇四、一〇五頁。
- (40) 前掲、蔡錦松『盛世才在新疆』、二五三頁。前掲、『中華民國重要史料初編——対日抗戦時期 第三編、戦時外交(参)』、四三七頁。
- (41) 以下の盛世才の言葉はカシユガルのカーズィ長がモスクで金曜の祈りの後に民衆に伝えた内容である。IOR2383, 1938. 11. 17.
- (42) IOR2357, 1938. 1. 10, 1938. 1. 17.
- (43) アブドゥル・カーティル・ハジはカシユガル区出身者でタシユケントに渡り革命運動に従事したことがあり、王寿成らとともにコミンテルンから新疆に派遣されてきた。一九三八年初めには彼も盛世才の肅清対象となり逮捕された。IOR2392, Who's Who in Sinkiang, Corrected up to 26th July 1938, p. 12. IOR2357, 1938. 3. 28.
- (44) 前掲『新疆内幕』、一〇三頁。
- (45) IOR2383, 1938. 7. 14.
- (46) IOR2357, 1938. 2. 14, 1938. 4. 25.
- (47) IOR2357, 1938. 3. 21. IOR2358, 1938. 9. 29.
- (48) 日本製品は英国籍商人によつて新疆に輸入されていた。IOR2332, 1936. 10. 1. IOR2364, 1936. 9. 24, IOR2357, 1938. 5. 16.
- (49) IOR2364, 1935. 9. 19.
- (50) IOR2383, 1938. 4. 14, 1938. 7. 14. IOR2332, 1938. 8. 3.
- (51) IOR2332, 1938. 12. 5.
- (52) IOR2383, 1938. 11. 3.
- (53) 新疆維吾爾自治区檔案局、中国社会科学院边疆史地研究中心、《新疆通史》編撰委員會編『抗日戦争時期新疆各民族民衆抗日募捐档案史料』、新疆人民出版社、烏魯木齊、二〇〇八年、三二一—一〇〇頁。

- (54) IOR2383, 1938. 11. 10.
 (55) IOR2332, 1939. 1. 5.
 (56) IOR2383, 1939. 2. 2.
 (57) IOR2383, 1941. 5. 29. IOR2383, 1941. 6. 26.
 (58) イギリス領事館の報告の話題はほとんどがこの点に関わるものである。例えば、IOR2383, 1938. 9. 1.
 (59) IOR2358, 1938. 12. 27. Allen S. Whiting and General Sheng Shih-tsai, op.cit., p. 65.
 (60) IOR2383, 1940. 5. 9.
 (61) IOR2383, 1941. 7. 3, 1941. 8. 28.
 (62) IOR2383, 1942. 3. 12, 1942. 3. 26.
 (63) IOR2383, 1940. 5. 9.
 (64) 抗日戦争開始三周年記念の大衆集会で、演説者がホータン地区での反乱と、政府軍の苦戦を認め、速やかな鎮圧を約束している。IOR2383, 1940. 5. 16, 2383, 1940. 5. 30, 1940. 7. 11. 中和田地委党史弁公室編『抗日戦争時期中共党人在和田』は、ホータンで行政に携わっていた中国共産党員の回想や、県当局の報告、命令など様々な史料を載せているが、反乱が起こっていたと思われる一九四〇年前半に関する記述はほとんどない。反乱の主体、状況など全く不明である。中和田地委党史弁公室編『抗日戦争時期中共党人在和田』、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九九五年。
- (65) IOR2383, 1940. 4. 18.
 (66) IOR2383, 1940. 5. 2.
 (67) 一九八九年、九〇年に新疆でフィールドワークをおこなったデルソンは、新疆には広くナチス・ドイツやアドルフ・ヒトラーに対する賛美が存在していると指摘している。この背後にも三〇、四〇年代の歴史的経験があると思われる。Justin Jon Rudelson, *Oasis Identities: Uygur Nationalism Along China's Silk Road*, Columbia University Press, New York, 1997, pp. 72-75.

木下 恵二(きのした けいじ)

所属・現職

慶應義塾大学商学部非常勤講師

杏林大学外国語学部非常勤講師

横浜市立大学国際総合科学部非常勤講師

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部非常勤講師

慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得満期退学

アジア政経学会、日本国際政治学会

中国近現代政治史

最終学歴

「一九三〇年代新疆盛世才政権下の『ソ連型』民族政策とその政治的矛盾」『史学』第七十八巻第四号(二〇〇九年)

専攻領域

「揚増新の新疆統治——伝統的統治と国家主権——」『法学政治学論究』第四八号(二〇〇一年)

主要著作

「中国国民政府の新疆統治——一九四二〜四七年——」『法学政治学論究』第三八号(一九九八年)